

腹話術や落語、南京玉すだれなど多彩な芸で笑いを誘いながら、少し難しく大切な介護や人権について楽しく学ばせてくれるお笑い福祉士(ボランティア芸人)の宇田 賢一さん(57歳)取材しました。



笑顔からの夢おこし

お笑い福祉士
社福亭モーリー
うだ けんいち
宇田 賢一さん

腹話術で相棒の元気くん

「笑い」は体と心の薬になる
多彩な芸のお笑い福祉士

平成29年に大阪のカルチャースクールで「お笑い福祉士」の認定を受けた宇田 賢一さん(泉町)は、社福亭モーリーの芸名で高齢者施設や公民館などの依頼を受けて、多彩な芸を披露するボランティア芸人の活動をしています。

「お笑い福祉士」社福亭モーリーのトレードマークは、赤いちゃんちゃんこに大黒帽子の衣装と人形の「元気くん」。腹話術で相棒の元気くんを掛け合ったり、南京玉すだれや小唄など楽しい芸を観て笑顔になってもういながら、認知症や高齢社会、防災や感染症についてなど、役立つ話を学んでもらうスタイル

ルです。実家の料亭で調理師をしていた経験もあるので、料理教室の講師や人権落語の依頼を受けることもあるといいます。

「お笑い福祉士」は、芸名を付けて舞台に立つことを許可するという、プロの落語家が個人的に創設した称号だそうです。「笑い」は高齢者の心と体を癒す薬になる、と考える宇田さん自身のスキルアップにもなっているそうです。

家族がそれぞれの夢へ

舞台を下りた宇田さんは、高齢者施設の職員をしながら家庭を守る主夫です。

宇田さんは大学の法学部を卒業

業しました。同じ大学の医学部に在学していた奥さまは努力の末に念願の産婦人科医となりました。奥さまが3人目の子どもを妊娠中に、守山市民になったそうです。

引越したばかりで求職中の賢一さんと、医師の夢を叶えて多忙な奥さま。法曹界に憧れていた在学時代を知っていた奥さまから「挑戦してみれば」と背中を押され、家事と育児を引き受けながら司法試験を目指す専業主夫になりました。

それから20年以上、3人の子どもを育ててPTA役員もしたし、毎日4人分の弁当を作っていた持っていたこともありません。法曹界への夢は叶いませんでしたが、3人の子どもたちは成長

して、それぞれの夢に向かって歩いています。

50歳を超えて新たな夢へ
福祉系の国家資格に挑戦

家庭を守りながらも「社会や人の役に立ちたい」という思いがあった宇田さんは、二つの大きな経験をきっかけに福祉の世界を志すようになりました。それは、災害ボランティアとして東日本大震災の被災地を見た衝撃と、実家の父が倒れて、財産や施設入所を法的に管理し支える後見人になった経験です。

宇田さんは福祉の視線で高齢者を支える「成年後見人になりたい」という新しい夢を持ちました。法曹界を目指した経験も役に立つと考えました。



腹話術の元気くんは高齢者のアイドル



南京玉すだれの芸も披露します



人権やコロナ、認知症などためになる話も

舞台を下りた宇田さんは、主夫とパートタイムの介護職、介護福祉士、保育士、精神保健福祉士、社会福祉士、調理師と多様な顔を持って夢を追いかけています。



舞台を下りた宇田賢一さん

夢を叶えるために福祉系の国家資格である「保育士」「介護福祉士」「社会福祉士」「精神保健福祉士」の取得を目指しました。受験には実技経験が必要な資格もあつたので、市内の高齢者施設で働くことにしました。高齢者とのふれあいは、宇田さんに「笑いの力を教えてくれました。それが「お笑い福祉士」の原点になったといいます。

宇田さんは、「司法試験に何度も落ちたのに、50歳を超えてから主夫と新しい夢のための国家資格を目指すのだから、しんどい時もありました。それでも楽しいと思えるかどうかは乗り越えるキモだったと思います。だから、お笑い福祉士の活動は私の趣味であり、生きざまでもあります」と話していました。

やりたい夢、挑戦の喜び
それが我が家の家訓

宇田さんは高齢者施設の仕事とお笑い福祉士のボランティア、主夫をこなしながら、国家資格を取得し、必要な研修を経て名簿に登録され、実際に家庭裁判所から法定成年後見人の任を受けることになりました。とうとう、夢を叶えたのです。

次なる夢は、「子ども食堂のような高齢者のための居場所を作る」「社会起業家」といいます。

宇田さんは「社会起業家を実現できるかどうかは分かりませんが夢は描いていた。僕も家族もとにかく自分なりのやりたいことにチャレンジして、駄目ならそれから新しいことを見つけたいというスタンス。それが我が家の家訓でしょう」と笑顔で話していました。